

はじめに

「心の働きの総合的研究教育拠点」(京都大学心理学連合)(京都大学、D-2)(拠点番号D-10)は、2002(平成14)年度文部科学省21世紀COEプログラム拠点形成事業として採択され、2002年10月より、活動を開始した。

高度情報化社会、少子高齢化、地球環境破壊等、未曾有の大変化が急速に進行する中で、人の心の本質を知り、人の心を導くことのできる新しい知の体系が求められている。この時代の要請に応えるため、我々は、実験科学、フィールド科学、臨床実践科学としての心理学を統合し、新世紀にふさわしい融合科学としての心理学を構築することを目指して活動している。

京都大学の心理学の特徴を一言で表すならば、それは「創造的で多様な個別活動とその調和」である。それを活かすため、我々は、3つのレベルで研究活動を推進してきた。第1のレベルは、研究者の個別研究活動を発展させることであり、それにより、創造性豊かな一次的研究成果を蓄積することである。これは何よりも重要な活動であり、本拠点の基礎体力を培うものである。第2のレベルは、「イメージと表象の性質と機能」「身体化される心」「文化・社会的環境との相互作用」「進化と生涯発達」という学際的・国際的研究チームとしての活動である。各チームが企画したセミナー、ワークショップ、シンポジウム等における情報交換と討論を通じて、知識を集約し、新たな共通課題や共同研究の可能性を探ることである。第3のレベルは、心理学連合全体としての諸活動、具体的には合同のシンポジウムや研究成果の出版である。

2003年度には、各レベルで具体的進展が見られたが、第3のレベルで、特筆すべきことがあった。それは、第4回京都大学シンポジウムの主催である。12月にミシガン大学でおこなわれたこのシンポジウムでは、心理学連合とミシガン大学心理学部それぞれの主要な教員が第一級の研究を報告しあい、活発な論議が交わされた。また、同じ機会に、両大学は国際交流協定覚書に調印し、京都大学の全面的な支援のもと、我々は、全米屈指の心理学研究拠点であるミシガン大学との間の長期的な共同研究体制を整えることとなった。これは心理学連合にとって大きな力となるであろう。

一方、教育活動においては、部局超越的な研究教育環境において、基礎から臨床に至る広い視野を持った人材を育成することを目指している。多くの講義を他学部・他研究科から自由に履修可能とし、修士・博士の学位論文審査も、部分的にはあるが、相互に共通化した。2004年度からは、学部初級実験を共同で実施する。優秀な大学院生には研究費を支給し、国際相互交流制度を設けて、若手の交流を支援している。また、他のCOE拠点の協力も得て、国際若手シンポジウムを開催し、刺激的環境と自由な討論の場を提供した。こうした環境で育った大学院生たちが、近い将来、新たな心理学研究の地平を拓いてくれるであろうことを確信している。

本冊子は、本事業第2年度における活動実績をまとめたものである。本事業計画に続けて、シンポジウム、研究会、その他の活動等の記録、研究業績一覧、外部評価、及び若干の既公刊・未公刊の論文を巻末に収録した。収録された研究論文は、いずれも直接的・間接的に本事業の補助を受けたものである。京都大学心理学連合としての活動の一端を知っていただければ幸いである。

なお、本拠点の活動に関する情報は、以下に公開されているので、ご参照いただきたい。

<http://www.psy.bun.kyoto-u.ac.jp/COE21/>

2004年3月4日

拠点リーダー・藤田和生

プロジェクトの内容

「心の働きの総合的研究教育拠点」
Center of Excellence for Psychological Studies
(京都大学心理学連合)

プロジェクトの目的

21 世紀は「心の時代」になるであろう。情報化社会によるグローバリゼーションや少子高齢化など、人類がかつて経験したことがない状況が急速に到来している。物質文明の進歩が人間の幸福に直結しないことも明確になり、未来の予測が困難な中、人々の心は乱れ、さまざまな社会的問題を生んでいる。このような時代にあって心理学の責務は大きい。この緊急かつ重要な責務を果たすべく、我々は、実験科学、フィールド科学、臨床実践科学の連携により、融合科学としての心理学を志向し、新たな知の方法論を切り拓くとともに、未来を展望できる 21 世紀の人間観を創出し、それらを国際社会に向けて具体的に発信する。

後述のように、京都大学においては、認知心理学、発達心理学、比較心理学、社会心理学、脳科学、臨床心理学等のあらゆる分野において優れた研究・教育をおこなってきた。国際的学術誌への論文掲載、学術書の出版、若手研究者の育成はもちろん、各種科学研究費の他、未来開拓学術研究推進事業、科学技術振興調整費などの大型研究プロジェクトにおいても中心的な役割を果たしてきた。多数の国際共同研究が継続的に実施されており、その活動は国内外に高い評価を得ている。

しかし京都大学の心理学における最大の特色は、その相互の協調体制にある。心理的諸機能の認知科学的・脳神経科学的研究からフィールド心理学的研究、動物を対象とした比較認知研究に加え、年間 5800 件を越える心理相談を行っている臨床実践活動に至るまで、多様な心理学領域を専門とする 40 名に近い研究者が、教育・研究両面での柔軟な相互作用によって、独創的成果を生みだしてきた。これは西田哲学や今西学派などの独自の基盤を持ち、個性や多様性を重んじつつ互いに協調し切磋琢磨していく京都大学なればこそその特色といえる。

すでに我々は、30 年以上の歴史を持つ心理学教官連絡会という月例の会合を通じて、常に情報を交換し、学術的交流を深めてきた。2000 年には日本心理学会を共同で開催し、翌年には同連絡会編の書籍（「21 世紀の心理学に向かって－京都大学の歴史と現状－」ナカニシヤ出版）を出版した。教育面では、数多くの講義を相互履修可能な共通科目に指定し、学部学生や大学院学生が部局超越的な指導を受けられる体制を作ってきた。本拠点形成計画において、我々はこの伝統をさらに飛躍的に発展させ、現在多数の研究科に分散している関連講座を束ね、ヴァーチャルな研究科のように機能する連合組織－心理学連合－を構想した。

このような部局超越的な教育・研究環境のもとで、今後 5 年間に取り組むべき共通の問題空間として下記に挙げる 3 項目を設定する。この問題空間に対し、実験からフィールド、臨床に渡る多様なアプローチにより相互に連携しつつ研究を推進し、欧文による学術論文や書籍の公刊、国際シンポジウム、定期的な研究者、大学院生の相互国際交流などを通じ、心理学の世界的研究拠点として、その成果を発信する。またその成果を踏まえた臨床実践活動を通じて、広く社会に資する貢献を目指す。さらに、言語学、社会学、人類学、精神医学といった隣接領域との相互作用により、より総合的な人間学への道をも探る。

プロジェクトの視点

今後5年間の研究を収斂させるため、我々は「心を知り、心をはぐくむ」という共通テーマを設定した。このテーマが構成する問題空間には、図1に示す3つの下位空間がある。

1. 自然的現実との相互作用：心の基礎的構成要素はどのような生物学的起源をもち、システムとして統合されているのか（図1右）

心の生物学的基盤に関わる問いの総体である。生物としての人は物理的環境と人的環境に取り巻かれている。これら環境内の事物の認識、他者や集団、文化との関わりなどがこの問いに含まれる。これら諸過程を決定する環境的・個体的要因を同定し、その相互関係を明らかにすることが中心課題である。

2. 社会的現実との相互作用：人の心は他者との関係においていかに生成され、社会的現実の中でどのような在り方をするのか（図1左）

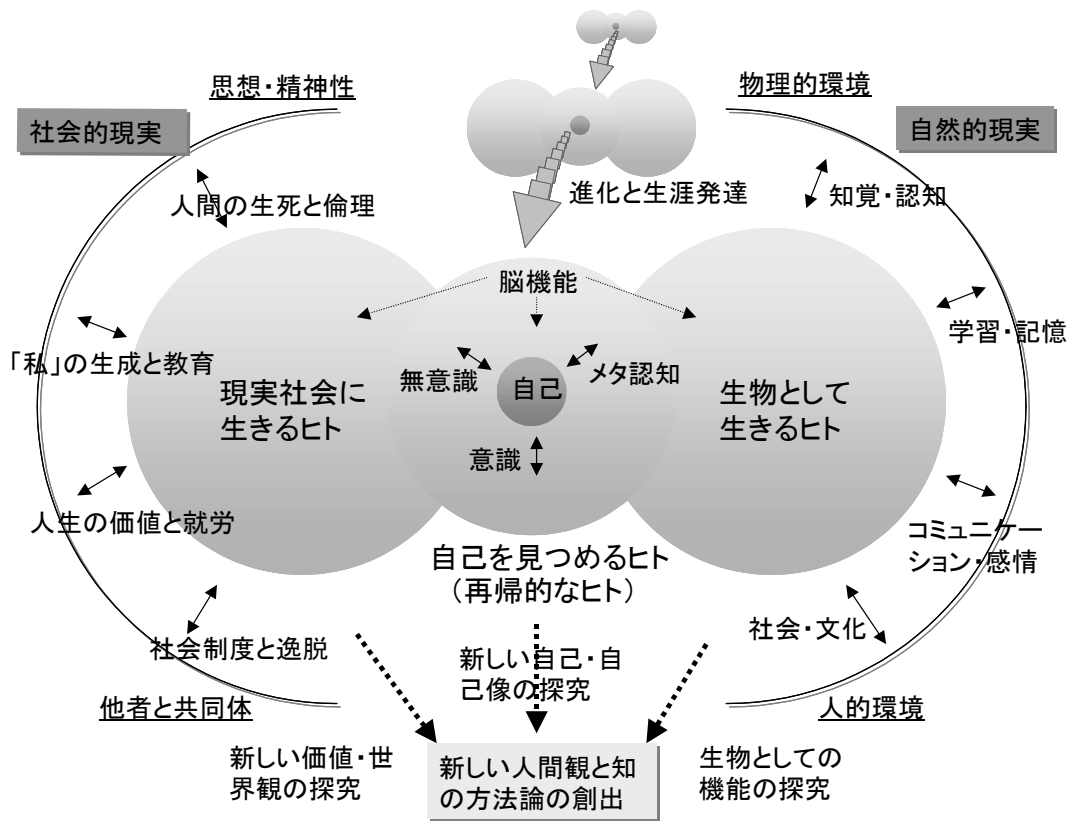
他者の中に生まれる人は、常に変化する文化・社会・歴史的環境の中に生きており、それに対応するよう求められる。その対応様式の解明や、制度や規範といった社会的現実に対応しきれない場合に生じる問題とその対処法のみならず、人が現実社会に働きかけていく心の過程についても、心理臨床実践からの知見を基盤にして検討する。

3. 内的現実との相互作用：自らの営みを再帰的に反省する自己理解の様相と働きは何か（図1中央）

人において最も発達している自己モニタリング機能、自己意識に関わる問いの総体である。自己は自身の内部に存在する第3の環境ともいべきものであり、人は常にそれを生みだし、またそれと相互作用しつつ行動を決定している。人の最大の特徴とも言えるこの自己との相互作用はいかにして形成されるのか、実際いかに機能しているのか。これらを明らかにすることがこの問いの中心課題である。

さらに、これら3つの心的機能は、必然的に時間を追って変容してゆく。経験による短期的な変化から、数十億年に及ぶ生命の進化史に至る、異なる時間尺度における発生過程の理解なくしては、動的変容を遂げる個体や民族、さらには種全体の心の性質を正しく理解することはできない。また、あらゆる心的機能は、その神経系によって実現される。したがって、これを実現する脳機能の解明も必然的に重要課題として位置づけられる。

このように、心が投げかける問題は多様でかつ複雑である。この広大な問題空間の総体を、我々は「心の宇宙」と名づけ、この空間内に個々の研究課題を位置づけることにより、心の総合的理解を目指す。



【図1】心の宇宙

研究課題

最重要課題として、上記3つの下位問題空間に以下の4研究課題を位置づけ、個々の課題を推進するとともに、それら相互の関連性を解明することを通じて、心の働きの総合的理解を目指す。

A. 「イメージと表象の性質と機能」

チームリーダー： 芋阪

サブリーダー： 大山*、齊藤

メンバー： 江島*、岡田*、皆藤*、河合、楠見、齋木、櫻井、田中*、鶴田*、友永*、藤田、藤原*、船橋、やまだ、山本*（五十音順、*研究協力者）

心の内部に構成されるイメージや表象は、環境や社会や自己の認識の基盤を提供する。例えば事物の認識は感覚器官から手に入れた刺激と主体が持つ内的表象の照合過程である。記憶再生は、過去経験を心的表象として再構成することである。また社会・文化的に構成されたイメージや表象は、人の思考や感情を方向づけ、行動を組織する。人は内的自己と表象とを対話させ、それにより過去の経験を反芻し、現在の行動を決定し、将来の行動を計画する。心を制御する最大の要因である表象やイメージは、いかにして形成され、いかなる性質を持ち、いかに機能するのか、またそれは脳内でいかに実現されているのか。これらは心の基礎的機能を理解する上でもっとも重要な課題である。

現在までの主な成果

- ・特定脳部位の階層的ネットワークが作業記憶ならびに心的イメージの生成に重要な機能を果たすことを示した（苧阪他）。
- ・前頭連合野における情報の一時貯蔵とその処理プロセスを明らかにするとともに、前頭連合野と機能的な関係の強い視床や前頭眼窩野の働きやそれらからの影響を明らかにした（船橋他）。
- ・刺激情報を符号化するセル・アセンブリを同定し、その個々のニューロンの活動を分離する画期的手法を開発した（櫻井他）。
- ・物体の位置と属性の統合過程を分析する心理課題を開発し、視覚認知が注意を媒介とした記憶情報と視覚情報の恒常的相互作用の過程であることを示した（齋木他）。

B. 「身体化される心」

チームリーダー： 伊藤

サブリーダー： 蘆田、松村

メンバー： 板倉、河合、黒川*、桑原、内藤、山中、吉川（五十音順、*研究協力者）

心の諸機能はすべて身体において実現されている。身体を離れて心は形成されず存在し得ないという認識は、近年心を理解するための新たな枠組みとなりつつある。例えばボールの大きさや形や重さは、それを持つ手の開き具合や筋緊張を通して認識される。また主体の内部に構成された社会的身体と生物学的身体の整合性を保持することは、人が社会的存在として生きるための基礎を提供する。基礎的外界認識における心身の相互作用を実験心理学的に分析するとともに、身体疾患における心理的側面の解析、遺伝子治療、移植医療などに関わるカウンセリング等の実践から、医学や自然科学への提言につなげる示唆を得る。

現在までの主な成果

- ・医師による遺伝カウンセリングの中に心理面接を導入し、遺伝医学における客観的発症確率以外の主体的な心的次元がクライアントの判断に影響することを示した（伊藤他）。
- ・心理実験および fMRI により、表情認識の心理過程と神経機構の相互関連性を明らかにした（吉川他）。

C. 「文化・社会的環境との相互作用」

チームリーダー： 北山（9月1日付でミシガン大学教授）、杉万（9月1日より）

サブリーダー： 桑原、杉万

メンバー： 東山、松沢*、吉川、渡部（五十音順、*研究協力者）

心というシステムは、人自らが歴史的に作り上げてきた環境の中で機能する。人を取り巻く環境は人が自身を社会の中に定位する枠組みを提供する。近年極めて基本的な認知にも、主体がその心を培ってきた環境の影響が存在することが示されている。こういった深甚な社会や文化の影響は、いまだ十分に理解されているとは言えない。一方、社会的現実と向き合う主体にとっては、文化・社会的な環境とその急激な変化に対応できないことから、様々な心理的問題が生じてくる。臨床的実践を通じて、このような問題の解決を探っていくことが急務である。

現在までの主な成果

- ・東洋的世界観と西洋的世界観が線分長の認知的処理などにも影響することを示した（北山他）。
- ・過疎地域の活性化運動において、古い集落運営システムと活性化運動による新しい住民自治

システムが、車の両輪として機能していることが、その成功への要因であることを明らかにした（杉万他）

D. 「進化と生涯発達」

チームリーダー： やまだ

サブリーダー： 板倉、田中*

メンバー： 遠藤*、金田*、子安、友永*、藤田、松沢*、溝上*（五十音順、*研究協力者）

あらゆる心の働きは時間軸に沿ってダイナミックに変化する。特定の心的機能に関するモデルは、その機能の時間的変化をも予測可能であるべきである。系統発生と個体発生を、進化的比較、世代間比較、生涯発達比較等を通して明らかにする。臨床実践においても幼児期からの生育史やライフストーリーは問題行動の理解と治療に重要である。臨床実践と生涯発達をアクティブに連結し、説得力のある社会政策や教育政策を提案する。心の発生過程を理解することなく、心の将来を正しく予測することはできない。

現在までの主な成果

- ・行動研究の新しい枠組みとして「質的心理学」を創出し、研究を展開した（山田他）。
- ・基礎的知覚過程から社会的知性に至る種々の認知活動に関する比較認知科学的分析を進め、認知の多様性を示すとともに、その進化の過程を考察する多様な資料を得た（藤田他）。
- ・参与観察という新たな手法により、実母に養育されたチンパンジー乳幼児の認知発達過程を詳細に分析するとともに、成体の多様な知性を実験的に分析した（松沢*他）

2004 年度以降に向けた追加研究計画

新たに情動（**emotion**）に関する研究を、重要課題として取り上げる。情動は多くの認知活動と相互作用を持ち、人の行動を規定する大きな要因である。当初計画ではこの点が明瞭に意識されていなかった。これを**研究課題B**の中心課題として位置づけ、情動が認知・行動におよぼす影響およびその適応的機能について比較認知科学、神経科学、心理実験、臨床実践など多様な観点から分析する。外界の刺激に対する情動喚起・表出の心的機能、他個体の情動状態を認知し自己の行動調節に利用する心的機能、およびそれらを可能にする神経機構の解明は、ヒトの社会的知性の根幹に迫る特に重要な課題である。これらについて、神経生理、行動実験、機能イメージング、質問調査等の多様な手法を用いて分析する。又、情動のもつ病理的側面についても検討する。情動の社会文化的側面については**研究課題C**で取り上げる。

教育課題

目的

次代の心理学を担う独創性に富む人材を育成するため、大学院教育に関する諸改革を実施する。

大学院教育に関する主たる施策は、①研究活動を支援するカリキュラムの新規開設、②研究指導の部局超越化、及び、③現在多部局に分散して実施されている大学院教育カリキュラムの統合と、④それに伴う基礎教育カリキュラムの共通化である。共通科目の設定、心理学セミナー（懇話会）、国際セミナー等、その一部はすでにおこなわれているが、これをさらに大規模な統合へと発展させたい。これらを通じて、広い視野を持ち、基礎心理学と臨床心理学の双方を深く理解し、京都大学の独自性を持って世界最先端で活躍する人材を養成する。この教育システムにより、我々

は、基礎と臨床が融合した心の総合的理解を、さらに確実なものへと進展させたい。なお、これらはいくまで教官は個々の部局・講座に所属したままで実施されるヴァーチャルな心理学連合の新規教育活動であり、組織改編や教務事務処理の改変を伴うものではない。関連講座は以下の通りである（*は協力講座）。

文学研究科<行動文化学専攻・心理学専修>

教育学研究科<教育科学専攻・教育認知心理学講座、教育方法学講座>/<臨床教育学専攻・心理臨床学講座、臨床心理実践学講座>

人間・環境学研究科<共生人間学専攻・社会行動論講座、認知科学講座、行動制御学講座>

高等教育研究開発推進センター<高等教育教授システム研究開発部門*>

情報学研究科<知能情報学専攻・生体認知情報学講座>

生物科学研究科<霊長類学専攻・思考言語分野*>

現状と今後の課題

次代の心理学を担う独創性に富む人材を育成するため、連合組織として以下のような具体的な大学院教育に関する諸改革を計画した。以下にはその実現状況と、今後の課題について述べる。

(1) 大学院生の研究活動に関わる施策

- a) 「心理学の最先端」セミナーの開設 教官が自らの最先端の研究成果を報告し、大学院生とともに討論する研究会を不定期に開催した。動機づけを高め、討論の成果を研究に活かす機会を提供した。
- b) 国際大学院生交流の推進 最大3ヶ月間に及ぶ院生の招へい/派遣を実現した。
- c) 国際心理学セミナーの定期開催 海外の一流研究者の講演会を不定期に **16** 回開催した。
- d) 心理学懇話会の定期開催 国内の関連研究者の講演会あるいはセミナーを不定期に **14** 回開催した。
- e) 部局間研究グループによる共同指導 4つの研究テーマ別におこなわれた**(1)-a**のセミナーが、部局間研究グループによる共同指導体制として機能している。
- f) 大学院生研究発表会の共同開催 平成**14**年**12**月、**15**年9月に行われた国際シンポジウムにおいて、内外の若手研究者（主として大学院生）のポスター発表の場を設けた。**15**年7月に国際若手シンポジウムを学外の**COE**拠点の協力を得ておこなった。また、**15**年**12**月にミシガン大学において行われた京都大学シンポジウムにおいて、大学院生のポスター発表の場を設けた。若手研究費（大学院生養成プログラム経費）の受給者の発表会を**16**年3月に予定している。
- g) 指導教官互換性の実施 大学院生は他部局の心理学連合所属教官の実質的な指導を受けることができるので、特に制度としては設けなかった。
- h) アカデミックイングリッシュコースの開設 **15**年5月に、英語による研究発表指導の専門家を招いて、模擬国際会議の形態をとった研究発表及び討論演習をおこなった。
- i) 臨床実践を支援するシステムの整備 臨床実践を志向する大学院生を、連携した医療・司法・教育施設に派遣し、現場での教育・訓練をはかるとともに、連携機関から研究員を受け入れて、心理療法に関する訓練・研修を積ませた。

(2) 講義・単位に関わる施策

- a) 大学院共通科目の新規開設 上記4つの研究テーマに対応する共通科目としての演習の

開設を企画したが、**15**年度現在実現していない。しかし実質的にそれに代わるものを**(1)-a、e、f**で提供した。

- b) 大学院単位完全互換性の実施 制度は変えないまま、各部局で開講されている講義等の多くを相互に当該部局の講義として登録することにより、実質的には8割がた実現した。
- c) 修士論文審査の共通化 修士論文の副査を心理学連合所属の教官から自由に選定した。
- d) 博士論文審査の共通化 博士論文の副査を心理学連合所属の教官から自由に選定した。

(3) 学部学生に関わる施策

- a) 講義等単位の完全互換性の導入 **(2)-b**と同様の解決策をとった。
- b) 心理学導入教育の実施 1回生向けの少人数のゼミナール方式としておこなわれる心理学の導入教育科目として企画したが、**15**年度現在、実現していない。
- c) 2回生向けの初級実験の共同実施 **16**年度から文学部、教育学部、総合人間学部において実施される。
- d) 卒業論文指導及び審査の部局超越化 学部学生についても、卒業論文を始めとする研究指導は他部局の心理学連合所属教官の実質的な指導を受けることができるので、特に制度としては設けなかった。

このように、教育に関する施策は、おおむね計画通りに進んでいる。**(3)-b**については各教官の過重負荷が予想されるため、現在のところ実現の見通しが立っていない。これについては当面実施を見送ることとしたい。**(3)-c**の初級実験の共同実施が制度上は最も大きな変革であったが、この効果が現れるにはまだ時間が必要である。現在のところ、特に新たな追加的施策は考えていない。